

伝統芸能

はな つづみ 花鼓

文楽の演目には「時代物」と「世話物」の二つがある。「世話物」は町人の世界を基に物語が設定され、市井の人々のこまやかな感情を語りだすことに専心でさる。しかし、武士の世界を描く「時代物」の場合、そ

うはいかない。豪快無比、荒唐無稽でもあり、語り手の日常とはかけ離れた世界が展開するからだ。体力の消耗も並大抵ではない。

今月の国立小劇場文楽公演「奥州安達原」での私の持ち場「環の宮明御殿の段

文楽太夫 豊竹英大夫

豊竹英大夫＝東京・池上の実相寺で 撮影・田中文太郎



後」は、激しい語りを要求される三段目の大団円。武家の娘である悲劇のヒロイン袖萩は、父が仕える源義家の敵である安倍貞任と契ったため、父への恩と夫への愛に引

昂揚の極致、「時代物」

き裂かれ、自害を選ぶ。父も、皇弟環の宮を敵にさらわれた責めを負って切腹。夫と娘を同時に失う妻の愁嘆。寂寞感極まる場面となる。

ところがその直後、義家と敵の安倍貞任・宗任兄弟の三人の武將が登場し、現代では考えられない武士の義理物語が進行。義太夫節も先程の哀切はどこへやら、とんでもなく昂揚した曲節へと展開していくのだ。太極三味線の象牙撥は細かく激しくタイナミックに絃をたたき、高く掲げられる数体の人形は空中を飛翔するようだ。

大夫の発声は人間の出せる限界にまで達し、語る私には意識を失いかける。この瞬間、演者も客席も一体となり、喜怒哀楽や人間模様を超えた世界に送り込まれる。もはや涙も意識もなく……。これぞ「時代物」の境地、なのである。